

〔話題〕

『長尾文庫』のこと

樋口 誠太郎

要 旨

今流に言えば「本学初代の学長」とでも言える当時の「公立千葉病院々長兼千葉医学校教頭」（後に明治19年の学制改革により、第一高等中学校医学部主事）をつとめられた長尾精一氏の在職20年の祝賀会が千葉で挙行された折に、その附帯事業として「長尾文庫」開設が審議された。

この「長尾文庫」が当時有名だったことは単なる「校内略図」のみならず、明治40年1月発行の『実測千葉市街図』の中にも見られる。それがいつの間にか姿を消し今では「長尾文庫なんて、ほんとうにあったの?」と疑問をさしはさむ人もいる程である。

私が亥鼻分館の古医書コレクションの目録を整理していく中で、これら古医書の中にやや大きめの（6 cm四方）蔵書印の押してある古医書に何度かめぐりあい一体これはどこから入ってきた本か、「長尾文庫」と文庫印が見られることからこの文庫のことを調べて見ることにした。幸い亥鼻分館に長尾美知氏のまとめられた『三十年祭記念出版・長尾精一傳』があって、この中に「長尾文庫」のこともくわしく記されていたので、これを参考にして「長尾文庫」の成立過程を調べてみたものである。

Key words: 長尾精一, 長尾文庫, 図書館文化

I. はじめに

私が亥鼻分館の古医書コレクションの目録整理を手がけている折に、時々たて・よこ約6 cmの比較的大型の蔵書印が押してある古医書を目にすることがあった。最初は、あまり気にも止めなかったが、ある時、医学部の石出猛史先生から「長尾文庫の印のあるものがございませんか」と言われ、その文庫印が第一高等中学校医学部長から千葉医学専門学校校長の職に在った長尾精一氏の在職20年祝賀附帯事業として、千葉医学専門学校内に設けられた文庫印であることがわかった。

もし最初からわかっていればこの文庫印の押印のある古書をチェックして当時どのような本が文庫の中に収蔵されたか、その傾向だけでもわかるとおもしろいと思ったが、もう大分整理がすすんでしまっていたので「長尾文庫」にどのような本が収蔵されていたかを分類整理することはできなかった。しかし「長尾文庫」が医学専門学校に附

随した文庫でありながら医学書のみではなく人文科学関係の書籍も収蔵されている特色あるもので



写真1 長尾文庫 文庫印

あったことがわかった。

本稿ではこの「長尾文庫」がどのようにしてできあがっていったかということを中心にまとめて見たい。

II. 長尾精一氏について

長尾精一氏は嘉永4年(1851)10月讃岐国(現・香川県)阿野郡国分村に生まれ、明治5年(1872)に22才で第一大学区医学校(現・東京大学医学部)に入学明治13年(1880)30才のとき千葉病院長兼医学教頭、明治23年(1890)第一高等中学校医学部主事に任ぜられた。また県立千葉病院々長も兼任された。

この第一高等中学校医学部を千葉へ誘致するに当たっては競争相手の名古屋やその他の強力な候補地よりも千葉のプラス面を強調しに連日文部省に手弁当で出かけられた。この長尾先生の尽力の賜であった、後に第一高等中学校医学部が千葉町に決定してから、委員が千葉町を視察に訪れたところ、その諸施設の貧弱なことに驚き「これは長尾さんに一杯喰わされた…」と言って大笑いになったそうである。しかし、これこそ現在の千葉大学医学部のスターティング・ポイントでもあったのである。

このように長尾精一氏が誘致に尽力された第



写真2 第一高等中学校医学部主事時代の長尾精一氏



写真3 第一高等中学校医学部正門
(第一回生依田美狭古アルバムより)
県文書館提供

一高等中学校医学部は明治22年(1889)9月から亥鼻台に第一高等中学校医学部と県立千葉病院の新築工事に着工し翌明治23年9月に移転を完了した。

この写真(写真3)を撮影した依田美狭古(旧佐倉藩江戸留守居役依田学海の長男)は明治23年8月に第一高等中学校医学部の入学試験に合格しているが、この写真はアルバムに「旧第一高等中学校医学部」とあるので、第一高等中学校医学部が亥鼻台に移転する前、即ち吾妻町の現在の千葉地方裁判所の辺^{あたり}にあった頃に彼が自分のカメラで写したものであろう。

また亥鼻台に移った第一高等中学校医学部は、明治27年9月第一高等学校医学部となり明治34年4月1日から千葉医学専門学校となり更に大正12年4月1日千葉医科大学になり長尾精一氏の将来構想が実を結んでいったといつて良いであろう。

III. 「長尾文庫」の成立過程について

明治33年6月に長尾精一氏が在職20年祝賀会が千葉町で催された時、その附帯事業として記念に「長尾文庫」という図書館を建設しては、という意見が出された。それは長尾精一氏の功績を永く後世に伝える記念事業として頭書は数名の方々の発案によるものであったが、祝賀会が挙行された明治33年の春頃から大きな話題となり現実味を帯びて協議されるようになったといわれている。

また、長尾先生も大いに喜ばれ賛意を表してお

られたという。特に、図書館を利用するということは学業に不可欠のことで、文庫の充実は「千葉医学」の発展に欠かせないと言われ、多大の望みを文庫創設にかけられた。

こうしたことから「長尾文庫」の建設について続々と賛成者が出て、明治33年（1900）4月25日には文庫建設発起人の協議会が開催された。発起人として当日出席したのは次の方々であった。

最初は、石井・林・小野田・加藤・吉野・十河・中村・海老原・安達・荒野・志田・森・清古・関根など14名の発起人が文庫の建設、書籍の

「長尾文庫」設立発起人協議会メンバー

(明治33年4月25日)

No.	氏名	職名	医学部卒業	備考
1	筒井秀次郎	第一高等学校医学部		発起人委員長
2	古屋恒二郎	同上(薬学)		
3	三輪 徳寛	同上(外科)		
4	荻生 録造	同上(眼科)		
5	石井 幹	同上 職員		
6	吉野 貴道	同上(事務長)		
7	森 理記	千葉病院司療長		
8	小野田周斉	千葉県会議員		
9	林 角吉	第一高等学校医学部卒	○	明治29年卒
10	十河 文平	同上	○	
11	関根 庄蔵	同上	○	明治26年卒
12	中村弥一郎	同上	○	
13	海老原精一			
14	安達 利介			
15	荒野 力雄			
16	志田 保			佐倉の医師
17	清古善次郎			
18	加藤慶三郎			

購入、資金の調達等の作業に入ろうとした折に、医学部の先生方がこの計画を知り大いに賛同され、一方で「長尾君在職二十年祝賀会」を計画している折でもあるので、附帯事業の一環として文庫建設を加えるならばということで、5月7日に改めて医学部の先生方も加わった前表のようなメンバーの方々が選出され、18名の委員が荻生録造先生を委員長としてこの事業の実現に尽力することになった。

長尾精一氏の在職二十年祝賀の宴は6月16日無事盛大に終了し、いよいよ長尾文庫建設事業が開始された。当時千葉県議会では同年12月に「長尾文庫建設補助費」として金壱千円を可決し、翌明治34年9月千葉県は同委員会にそれを交付した。その他各方面より多額の寄附金が集まり明治34年9月文庫建設に着手し、約4ヶ月後の同年12月に竣工した。

そして、「長尾文庫」がオープンするのは明治



写真4 長尾文庫外観(長尾精一伝・長尾美知著)

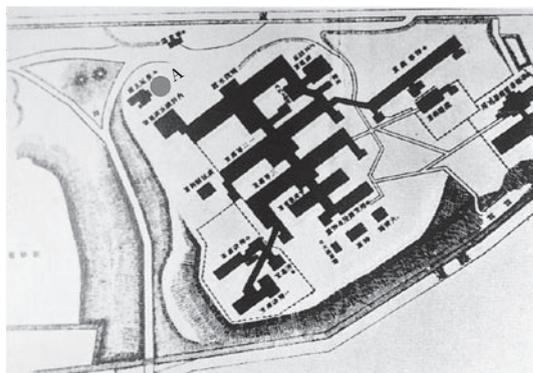


写真5 長尾文庫の位置A印
(長尾精一伝・長尾美知著)

35年(1902)4月であったとされている。この「長尾文庫」の特色を知るのには『長尾文庫規定』の「総則」を見ると良く判かるので、その部分を次に引用する。

第一条 本文庫は千葉医学専門学校長県立千葉病院院長長尾精一の多年養医済生の職に盡瘁したる頌徳記念の為有志者の醸金を以て之を設立す。

第二条 本文庫は医事、衛生、薬学其他諸般の図書記録及新聞、雑誌等を蒐集保存し広く衆庶の閲覽に供し教育の進歩を図るを以て目的とす。

第三条 本文庫は長尾文庫と称し事務所を千葉県千葉郡千葉町千葉医学専門学校敷地内に置く。
(第二款以下略)

この第一款の三か条を見れば「長尾文庫」がどのような旨示によって設立されたか、また第二条には「長尾文庫」に蒐集され、保存される図書が単に医学書のみではなく、新聞・雑誌を含む、広範囲の図書を人びとの閲覽に供し地域文化の向上をも図るという地域図書館の構想があったのである。

私が亥鼻分館の古医書目録整理に当たっている中で、写真6の『瘍科秘録』のような医書もあれば、その他いろいろな文学書、歌集なども含まれている。これは、当時文庫に入れる図書購入に当たった委員の方がたの、視野の広さを知ることができよう。

残念なことは、当初どのような本がどのくらいあったのかということが全く判らないので、文庫印のある古書を一冊ずつ調べていく以外に方法はないかと思われる。

また、「長尾文庫」に当時は多くの人が期待を寄せていたことが、たとえば、長尾先生在職20年記念の折の第一高等学校生徒総代島田淑の祝辞を見ると判る。そこに次のような要旨が述べられている。「祝 辞(前の部分省略)今茲に明治33年6月16日は、即ち先生の就任せられてより20周年に

当たる。是に於て先生の薫陶に浴する者、故旧と相謀り、此吉辰をトして祝賀の典を挙げ、其徳を頌し其続を表し併せて、長尾文庫を設けんとす。生等先生の真影を掲げ碩儒の賛を得て永く高德を欽せんとす。生等教を受けて幸に此佳辰に遭ふ(後略)」これを見ると、祝辞の中に「長尾文庫」が亥鼻台に造られることが判る。

また三宅千代治氏は「長尾恩師千葉病院並に第一高等学校医学部に二十年間奉職につき其祝賀と共に記念の文庫を建つるといふことを聞き伝えて」として「はたとせの長きあはひのいさほしのしるしにたてむ千葉の文庫」の詠吟を寄せられている。

写真7は、第1回生依田美狭古のアルバム(県



写真6 「長尾文庫」印のある『瘍科秘録』

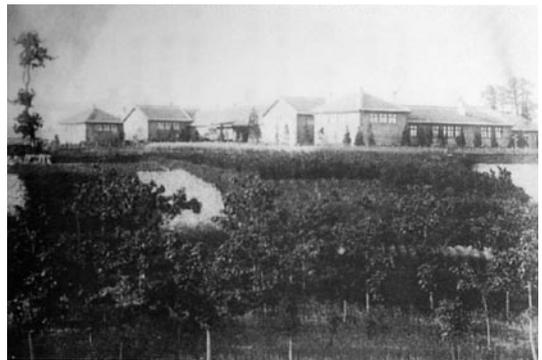


写真7 医学部を見る 左端の建物が長尾文庫か
(第一回生依田美狭古アルバム県文書館提供)

文書館提供)の医学部望見の写真であるが、建物のうしろ側から撮ったもののように、一番左端の建物が「長尾文庫」ではないかと思われるが、如何なるものであろうか。写真4の長尾文庫外観の右端に見られる松の樹のような植物が見られるが、これが目印になるのではないかと思われる。

IV. 長尾文庫^{しゅうえん}の終焉

長尾文庫は、千葉医学専門学校内の60坪の敷地をもって開館された。

この間、文庫名ともなった長尾精一氏は明治35年(1902)7月15日に52才で逝去された。

その後問題になったのがこの文庫を運営するに当たり建物の修繕費、文庫で働く人の人件費等々、かなりの経費が必要となったことである。

明治43年(1910)文庫理事者協議の上、長尾文庫を処分して、長尾精一先生の銅像を建てることになり、同年10月起工、翌明治44年4月に竣工し、同年5月に行なわれる予定の千葉医学専門学校及千葉病院創立25年祝賀会と同日にその銅像の除幕式も行なわれることになった。

明治44年5月8日、時の文部大臣小松原英太郎氏、前・千葉県二代県令船越衛氏、現千葉県知事告森良氏等々多くの来賓の見守る中で、長尾精一先生胸像の除幕式が行なわれた。

製作は美術学校教授高村光雲氏であった。

なお、除幕式の席上、長尾文庫理事長、銅像建設委員の三輪徳寛先生は事業報告の中で、長尾文庫の建造物は長尾家の了承を得て、千葉病院に買い上げてもらい銅像建設資金の一部とすること、「長尾文庫」の名称は之を残し現在所蔵の図書類は長尾文庫の名義で、学校の図書室に納付すること



写真9 長尾精一先生胸像
(現在医学部正門前の木立の中に台座と顔面レリーフあり)



写真8 晩年の長尾精一氏(明34年)



写真10 長尾精一先生像 長尾龍郎氏旧蔵
高村光雲作 千葉大学あのはな同窓会蔵



写真11 千葉医学専門学校内に建つ先生の胸像（左端）
（大正4年卒業生アルバム・亥鼻分館蔵）

にしたこと、銅像建設費の中で余剰金が出たら図書類を購入して長尾文庫に入れるとされている。

ここで「長尾文庫」は約十年の歴史をとじて一つの建物から千葉医学専門学校内図書室の一コーナーとなったわけで、決して消滅したわけではない。

V. おわりに

千葉医学専門学校に「長尾文庫」という図書館が存在したということは知られていたが、現時点ではそれぞれがどのようなもので、どうして姿を消していったか良く判らなかった。

私が亥鼻分館の古医書目録づくりの中で、調査すると（完全ではないが）、医学部図書館に入っただけのものがあり、「長尾文庫」の印がある図書から見て、それはかなりの量があったように思われる。この他に薬学関係の図書が薬学部の蔵書となっていた。これは数年前に、当時の亥鼻分館の行方係長に、私が西千葉について行き「長尾文

庫」印のある図書を中心に、当館にゆずり受け、今回の古医書コレクション目録の中に整理して入れている。

また、「長尾文庫」の中に、当然所蔵されていた（「長尾文庫」・規定・総則第二条）と思われる当時の新聞や雑誌についてどのようなものを蒐集したか興味があるが、全く残っていないのは残念である。

こうした諸般の事情から学校内図書室の一コーナーとして存続していた「長尾文庫」も、学校が大きくなり、大正12年には千葉医科大学に昇格すると、研究室や図書室も移転し、中には研究室に「長尾文庫」の図書が入ったまま長い年月が過ぎ去ったものもあった。今回の目録作成が契機となり亥鼻分館にもどった「長尾文庫」旧蔵本もあったことは、前述のとおりである。なお整理の過程で、「長尾文庫」のあゆみが多少なりとも判ったことは、本学の図書館の歴史を考える上でも良いことであつたと、私は考える。

また、同時に千葉の「図書館文化」を考える上で大変貴重なことであると思う。

参考文献

- 1) 長尾美知. 長尾精一傳: 三十年祭記念出版. 東京: 政教社出版部, 1932.
- 2) 石出猛史. 続るのはな昔がたり. 千葉医学 2004; 3: 97-106.
- 3) 依田美狭古のアルバムより (石井豊氏旧蔵)
明治中期の千葉町風景
『千葉いまむかし』No. 3, 1999. 3